

日系校との交流 ～UNDOKAIを通して～

前リマ日本人学校 教諭

島根県松江市立小中一貫校八東学園 教諭 瀬崎 慎也

キーワード：リマ、国際交流、日系校、運動会

1. はじめに

ペルーの日系人社会では、運動会はUNDOKAIであり、日本人の我々からするととても親近感の湧くイベントである。また、私たちリマ日本人学校が関わることのあった日系校はラ・ユニオン校、ホセ・ガルベス校、ラ・ヴィクトリア校、それからヒデヨ・ノグチ校である。

2. UNDOKAIの様子

(1) 日秘友好運動会

日秘友好運動会は5月初旬に行われるペルーの日系人社会全体の運動会である。幼児からお年寄りまで幅広い年齢層の人が参加し、大いに盛り上がる。会場は「AELU（ラ・ユニオン総合運動場）」の陸上競技場であり、陸上競技を中心に予選を含めて数日間開催される。リマ日本人学校は小学1年生から3年生までの徒競走、小学1年生から6年生までの交流ゲーム、入場行進、全校表現（ダンス）、小学5・6年生のリレーに参加した。ペルーラジオ体操会設立25周年を記念して、会員の方々に交じってラジオ体操を一緒にすることもあった。5月の運動会に向けて2月に打ち合わせ会がある。もちろんスペイン語である。これが私にとっては1番の難関であった。学校の代表として、児童生徒、保護者、教職員を動かすために細かい日程や情報を確実に手に入れたいのだが、スペイン語の壁が大きく立ちふさがるのである。この3年間、スペイン語に関してはもっと努力して身に付けるべきであったと反省している。しかし、ラ・ユニオン校出身の若い学生が私の横についてくれ、一つひとつ丁寧に通訳してくれた。そのおかげで5月の本番を無事迎えることができた。さて、運動会当日についてであるが、規模が大きく、華やかである。あらゆる年齢層の人々が参加する祭りのような雰囲気であった。また、たくさんの日系人による運営なので、日本語がいたる場所にあふれ、日本の音楽が流れていた。私のふるさと、島根県の歌が流れたときには懐かしさでいっぱいになった。徒競走やゲームは日本人学校の他にも多くの日系校が参加しているが、限られた時間で詰めこまれたスケジュールなので、なかなか交流とはいかなかった。決められたところを走って、決められた動きをするといった感じであった。しかし、そのゲームの企画・運営をするのはラ・ユニオン校出身の若い学生たちであり、大きな会場で立派に役割を果たしていると感心させられた。打ち合わせ会の通訳も含めて、若い日系人のパワーには頼もしさを感じた。入場行進は朝ではなく、昼に行われる。ペルーの運動会では午前にも競技を行うが、入場行進とセレモニーを昼に行うことが一般的なようである。来賓が集まりやすいということなどが理由ではないかと思われる。この入場行進が盛大である。日系人の組織、学校、在ペルー県人会、スポーツクラブチームが行進を行う。リマ日本人学校も体育科の教員が中心となって、列をそろえて、足を高く上げて行進する練習をして、当日を迎えた。日系校も日本人学校同様、きっちりと練習をして当日を迎えており、足が揃っていて素晴らしい行進であった。また、ペルー島根県人会が行進している姿を見ると遠い異国の地で力強く生き抜いてこられた先人たちの姿が想像され、熱い気持ちになったのを記憶している。全校表現（ダンス）には日本人学校では小学1年生から中学3年生まで全校で取り組んできた。私はこの全校表現を2年間担当した。日本にいるときから同期の教員とメールで相談し、曲や衣装について話し合ってきた。ペルーへ赴任してから何度も話し合いをしながら、「花まつり」というダンスを完成させた。年齢の幅が広いこと、児童生徒の入れ替わりが激しいので配置が変わること、新入生・転入生にとっては練習期間が短いことなど、難しい点はいくつもあったが、私の大雑把な説明でも素直に聞いて、行動してくれる児童生徒と、陰でサポートして

下さった同僚の先生方のおかげで当日は日本人学校の良さをペルー日系人社会に伝えることができたのではないと思う。また、日系校は全校での表現ではないが、どの学校も趣向を凝らして、派手な民族衣装や楽器を用いて、いきいきとした表現活動をしていた。ペルーの民族音楽はノリがよく、聞いていると体が勝手に動きそうになるものばかりである。幼稚園からそのような音楽に合わせて踊るのだから、日本人とは動きが異なる。日本人学校の児童生徒にとってもいい刺激になったのではないと思う。最後にリレーに参加した。他校と競うことの少ない日本人学校の児童にとって、貴重な場であった。競技前の児童の緊張した表情はなかなか学校の中では見られないものである。少人数では自動的に走者が決まる日本人学校と、多くの児童の中からの選抜メンバーでレースに参加する日系校とでは条件がやや異なるが、子どもたちには関係ないことで、レースはいつも白熱した。学校のグラウンドとは違う大きな陸上競技場で一生懸命前を向いてバトンをつないだ経験は子どもたちにとってかけがえのないものになったと思う。

(2) リマ日本人学校運動会

5月下旬にリマ日本人学校の運動会は実施していた。私が以前、日本で勤務した2つの中学校はいずれも9月に運動会を実施していた。南半球のペルーでは日本と季節が逆になるので、この時期が運動会を実施するには適している。しかし、4月に新年度をスタートし、日秘友好運動会などの大きな行事や学校・学級・授業を軌道にのせること、自分自身がペルーでの生活に慣れること、新しい教員を受け入れることなど大変忙しい時期の運動会なので、準備がとて大変であった。前述の通り、海岸地帯に属するリマは1年を通して、ほとんど雨が降らない。したがって、運動会練習のときの雨プログラムを考えたり、本番の順延日程を考えたりする必要がなかった。実際、予定が変更になることもなかったし、判断を迫られることもなかった。すべてが予定通りに進むので、天候にはとても恵まれている。

内容は徒競走、綱引き、玉入れ、リレーなどを行い、小学部1年生から中学部3年生まで学年の幅が広い日本人学校ならではの温かい運動会であった。中学部がリーダーとなって全体を引っ張り、小学部高学年がつなぎ役になり、小学部低学年が一生懸命上級生についていくというこの学校の素晴らしい縦のつながりが見られる瞬間であった。この運動会には、日系校のラ・ユニオン校、ラ・ヴィクトリア校、ホセ・ガルベス校、ヒデオ・ノグチ校を招待した。PTA 種目のじゃんけん列車、小学5・6年生のリレー、全校児童生徒で行う綱引き、ダンスの披露（各年1校）、日本人学校の運動会の参観（全校表現を含む）を行っていた。私は校務分掌上、運動会の中身の企画・運営を行っていたが、交流校との連絡・調整を行っていた先生は大変苦労されていた。日程、人数、内容、座席、入場・退場、昼食の調達など細かい計画を立て、スペイン語で連絡をし、確認をするということだが、いくら準備をしても、当日急な変更があることはたびたびであった。そのようなときに現地採用の先生方がつなぎ役となり、うまく乗り越えることができたように思う。

さて、当日の交流についてであるが、日秘友好運動会と比べると規模が小さく、人数も少ないので、児童生徒同士の触れ合う機会を増やすことができた。PTA 種目のじゃんけん列車は児童生徒、来賓、保護者、交流校の教職員が混じって、和やかに行われた。まず、私が驚いたのは日系校とはいえ、ペルー人の児童生徒が普通にじゃんけんができるということである。じゃんけんは世界共通なのである。その上、掛け声もほぼ同じ「じゃんけんぽ」である。これは日系人社会だけでなく、ペルーどこでも「じゃんけんぽ」だそうだ。ただ、「最初はゲー」というのはペルーでは言わないそうなので、じゃんけん列車の際は、なかなかじゃんけんのタイミングが合わずに苦労していた。小学部5・6年生のリレーは、入念なウォーミングアップをする学校や、陸上競技の本格的なユニフォームを着て参加する学校など、友好的な交流というよりは学校の名誉をかけての戦いのような雰囲気であった。また、日本人学校の児童生徒が日系校一つひとつにエールを送る姿は微笑ましい場面であった。ただ、学校のグラウンドなので陸上競技場のようにコースが明確でないことやバトンパスの後の行動など指導が学校によってまちまちなので、走者が接触することもあり、ひやひやすることもあった。日秘友好運動会のリレー同様に他校の児童を意識し、緊張し、切磋琢磨し、達成感を感じるという経験の少ない日本人学校の児童にとってはいい時間であった。全校参加で行う綱引きは普通の綱引きとは異なり、綱を横に引き合って、自分たちの陣地ま

で引張ったチームの勝ちという競技であった。私は今まで見たことのない競技であった。私が赴任する前から伝統的に続いている競技だそうだ。この学校で新しく考えた競技なのか、どなたか先生方の中で経験したことのあった競技なのかはわからないが、日本人学校には様々な都道府県から派遣された先生方が集まってくるので、このことに限らず、新しい発見が数多くあった。この競技が1番児童生徒同士が笑顔で打ち解け合う交流種目だったように感じる。運動会の中で、毎年1校ずつダンスを披露していただいていた。2014年度がヒデオ・ノグチ校、2015年度がラ・ヴィクトリア校、2016年度がラ・ユニオン校であった。ペルー各地の伝統音楽に合わせて華やかな衣装で、優雅なダンスを毎年披露していただいた。日本人学校の児童生徒、保護者、教職員にとって身近でダンスを見る機会は限られているので、いつも圧倒される感じであった。また、交流種目がない時間帯は日本人学校の運動会を参観していただいていた。日本人学校の運動会を見て、日系校の児童生徒がどう感じてくれたかはわからないが、運動会の楽しさ、子どもたちの連帯感、ルールを守る規律正しさ、児童生徒主体で行う準備や片づけの良さなどを感じてくれていたらうれしく思う。日系校の先生方は会うたびに優しく声をかけてくださり、互いに認め合う関係だと感じるので、日本人学校の運動会や日本人学校の取り組みについて肯定的にとらえて下さっているのではないかとは思う。

(3) 日系校運動会

①ラ・ユニオン校運動会

ラ・ユニオン校は小学1年生から中学5年生までで児童生徒数は1100人を超える学校である。教職員も100人以上いる。電子黒板が多くの教室に配置され、隣接するスポーツ施設「AELU」で体育の授業を行うなど、学習環境も整っている。このラ・ユニオン校はリマ日本人学校が1番多くの交流活動をしている日系校である。互いの学校を訪問し合い、双方の授業を受け、共に昼食を取り、ゲームをしたりしてきた。教職員同士が情報交換をする機会もあった。ちなみに、ペルー前大統領は日系人ではないが、このラ・ユニオン校の卒業生である。10月に行われるラ・ユニオン校の運動会とはにかく派手である。明治・大正・昭和・平成の4つのチームに児童生徒も保護者、教職員もわかれて、朝の8時30分から夜の10時すぎまで大いに盛り上がる。ドローンで運動会の様子を撮影して大型ビジョンで中継し、セレモニーでは聖火リレーが行われる。食べ物の出店もたくさんあり、運動会のチーム「明治・大正・昭和・平成」のパーカー・マグカップなどのグッズを販売する店もある。運動会の結果は日系の新聞「ペルー新報」に掲載される。保護者の熱気もすごく、狭いコンクリートのグラウンドを応援パネル等でいっぱいにし、大きな声援を送る。1日に6回行われる応援合戦ではどのチームもアイデアを出し合って、楽しい応援を保護者が中心となって行う。児童生徒は学校指定のジャージにチームごとの揃いのTシャツを着て、走り回っている。競技はたくさんあり、やっている児童生徒も観戦している人も大いに盛り上がり、笑いが絶えない感じである。しかし、中には人権意識の低さを感じる競技もあり、私ならばやりたくないし、子どもたちにもやらせたくないと思う競技もいくつかあった。1つは、目隠しをしてゴールを探す競技であったが、目隠しをしている生徒が場所がわからなくて右往左往している姿を見て、周りの人たちが大笑いしているというものだ。もう1つは、おむつをつけた保護者が哺乳瓶をくわえながらリレーをするというもので、これも周りの人たちが大笑いしながら観戦していた。社会的弱者に対して優しくないペルーを感じる瞬間でもあった。日本人学校はミニカーリレーやピンポン玉入れリレーなどのゲームとりレー、入場行進を行った。当日は日曜日、ラ・ユニオン校側からは学年の指定もあるので、3年間日本人学校からの参加者を決めるのに苦労した。

②ホセ・ガルバス校運動会

ホセ・ガルバス校は日系校の中で1番歴史が古い。運動会は1926年から行われており、2015年には第90回を迎えた。校歌は日本語である。運動会当日は日秘両国国旗の横に大きな鯉のぼりが泳ぎ、赤組と白組の2組にわかれて行われる。ホセ・ガルバス校の児童生徒は人懐っこく、すぐに話しかけに来てくれる。規律を大切にしており、先生方の指導が行き渡っている印象を受けた。ラジオ体操は第2まで全員がきちんとそろえて行い、1時間以上行われるセレモニーもしっかりとした態度で臨む児童生徒が多い。ラ・ユニオン校以上に固い

コンクリートのグラウンドで行われるので、危ない。日本人学校の児童も競技中に膝をつき、擦りむいたことがあった。その際、ホセ・ガルベス校の中学5年生の生徒がさっと登場し、保健室まで連れて行ってくれた姿に感動したのを覚えている。日本人学校は水くみりレーや玉入れレーなどの交流種目1つに参加し、入場行進をした。また、ホセ・ガルベス校がある場所の治安があまり良くないので、送迎には細心の注意を払い、競技中も校門の外には本校の警備員を配置した。しかし、2016年は長い期間、この学校のある地域に非常事態宣言が出されており、日本人学校の参加を取りやめるといった事態になってしまった。

③ラ・ヴィクトリア校運動会

ラ・ヴィクトリア校とは、毎年1回、土曜授業「わくわくタイム」の一環で、サッカー交流を行っていた。子どもたち同士、保護者・教職員同士でサッカーの試合を行った。試合の待ち時間にはバスケットボールやポートボール、卓球をしたり、竹馬や羽子板などの日本の伝統的な遊びをしたりしながら交流した。日本へ出張に行き、ペルーへ帰ってきたという家庭も多い。したがって、日本の学校で教育を受けており、日本語がとても上手な児童生徒もいる。運動会のプログラムには日本語が併記されており、応援席でも日本語がたくさん聞かれた。運動会での児童生徒の交流はなかったが、運動会を参観に行き、児童生徒の熱い思いを感じることができた。赤組と白組それぞれが揃いのTシャツを着て、中学部の生徒がリーダーとなって白熱した運動会が繰り広げられた。特に印象的だったのは、開会式と閉会式の2回「ゴーゴーゴー（運動会の歌）」を歌う姿であった。全校児童生徒で作りに上げていく雰囲気を感じた。しかし、一つひとつの競技については、ルールがあいまいなこと、事前に児童生徒が内容をあまり把握していないこと、アンカーがわかりにくいことなどの問題点があり、少し混乱している場面もあった。

④ヒデヨ・ノグチ校運動会

この学校名を始めて聞いたときは驚いた。体操服の背中を見ると漢字で「野口」と書いてあるので、また驚いた。ペルーを訪れたこともある野口英世にちなみ、貧しくても努力すれば志を果たせるというメッセージを込めた校名なのだそう。私自身は日程が合わず、ヒデヨ・ノグチ校の運動会には行くことができなかった。また、リマ日本人学校の児童生徒がヒデヨ・ノグチ校の運動会に参加することもなかった。来賓として参加した先生の話によると、「明るく、ほのぼのとした運動会」ということである。校長先生自らがペルーの伝統料理パチャマンカを振る舞われ、アットホームな時間が流れていたようだ。

3. まとめ

どのUNDOKAIでも、「情熱」「笑顔」を感じる瞬間がたくさんあった。リレー、ダンス、綱引き……。どの学校でも、どの競技でも、ペルー人だとか日本人だとか関係なく、「情熱」を感じた。競技が終われば、みんな「笑顔」だった。細かいところを見ていけば、「もっとこうしたらいいのに」とか「自分ならこうしたい」という点はいくつもある。しかし、その会場で走り回っている児童生徒は「情熱」を持っていて、みんな「笑顔」なのである。一緒に走るということがペルーと日本の距離を縮めてくれる1つの方法なのかもしれない。UNDOKAIを通して多くの日系校と交流し、児童生徒は確実に刺激を受けている。「負けたくない」という気持ちを持っている。競技が終わった瞬間、その距離が近づくのだと思う。私たち教員も同じである。初めて見ること、することは緊張する。しかし、乗り越えれば「笑顔」になる。もっと頑張ろうという「情熱」をもらえる。ペルーのUNDOKAIが忘れかけていた大切なことを教えてくれたような気がする。